



日本記者クラブ

著者と語る

『政治家失格』

田崎史郎 時事通信解説委員長

2009年4月22日

この『政治家失格—なぜ日本の政治はダメなのか』（文春新書）では、政治家の質の低下が急速に進んでいるということを訴えたかったと言う。当然、そのことは政治記者や政治報道のあり方とも無縁ではない。そんなこともあって、自身が15年前に『文藝春秋』に書いた「小沢一郎との訣別」の経緯とオフレコ問題についても率直に語った。

この記者会見のお誘いを受けたときに、実は、かなり頑強にお断りしました。それは、自分自身のトラウマがありまして、小沢一郎さんとの訣別を「文藝春秋」に書きましたときに、ふだん取材している側ですけれども、取材される側に立ったときの怖さというのを嫌というほど味わったからです。

15 年前のトラウマ

僕は埼玉県の川越よりまだ先のほうに住んでいるんですけれども、そこまで週刊誌の記者が取材に来る。あるいは写真週刊誌の人が、知らないうちに写真を撮っていて、それが「フォーカス」に掲載されてしまった。フォーカスからは、撮って2〜3日後、「写真をいただきました」という電話が突然来ました。「別にあげた覚えはないんだけど、どうしたの？」といったら、家の近くで車の中から撮影していたということがありました。

あるいは新聞社系の週刊誌の方が来られて、何も知らずにドアをあけたら、「あの件で……」というので、慌ててドアを閉めようとしたら、靴をドアの間に挟んで、もう閉められないようにするんですね。50歩100歩、ああ、こういうひどいことを自分もしてきたんだと思ったのです(笑)。それで、やむなく上がってもらって、話を始めると、自分でオフレコを破りながら、これオフレコ、これもオフレコといいながら、非常につらい取材を受けた記憶がありまして、取材の対象、あるいは聞かれる対象になるということは、あんまりいいことではないなと思いました。

ここへ出てきますと、多分、小沢一郎さんとの訣別を書いたことに触れないわけにいきません。ちょっと足がすくむ思いがしたんですけれども、どうしてもということで、私は当クラブの企画委員をしている関係で、自分が会見拒否して、人に頼むというわけにもいかないよな、ということで出てまいりました。

きょうは、皆さんに本を読んでいただいているという前提でいろいろお話ししたいと思い

ます。

今回の執筆の動機

まず今回の本を執筆する経緯ですけれども、文春新書の担当者の方から、「いま、自民党にも民主党にも期待できないと思っている人が多い。その人たちにこたえるような本を書いてくれないか」というお誘いを受けました。

僕は、自分に書けるかどうかかわからないとお話したのですけれども、「この話はやはり田崎さんしか書けません」というふうにいわれて、そんなこともないだろうと思いつつ、自分にしかできないといわれたり、自分でそう思ったときに、目の前の壁が見えなくなる性格なのです。小沢一郎さんとの訣別のときもそうだったのですけれども、そういう性癖がありまして、ついつい受けてしまいました。

そのときに、知人の作家から、「本の中では政治家を批判されるんでしょう。批判する以上、自分のこともきちんと総括して書かなければいけない。読者の人たちは、政治家のこともさることながら、記者というのはどういうことをやっているんだろう、そういうところに関心があるのに、皆さん方はこたえてない」と言われました。そこで自分のこともある程度、書くことにしました。

だから、個人的なことがいろいろ出てきますけれども、本を読まれた方の反応を聞いていますと、3つのタイプがあります。一つは、今週の毎日新聞の書評欄で紹介していただいたような、政治を知るうえで、これはぜひとも必要な本だ、という読み方をされている方。次に、記者のあり方、記者の取材とか、記者のことについて非常に参考になった、という読まれ方。3点目は、これは家内が喜んでいるんですけれども、「あなたも随分苦労されたのね」というふうにいわれて、私の歩みに同情される方々。その3通りに分かれていると思います。

書くに当たっては、僕は自分が見聞きしたものに限って書こうと決めました。だから、人から聞いた話は書かない。

なぜか。最近、政治関係の本を読んでいますと、結構フリーランスの方が書かれているのですね。別にフリーランスの方が書かれることそのものは否定しないのですけれども、内容で間違っているものが少なくない。こんなことは言わないだろう、この場面はちょっと違っているのではないか、と思うことがいろいろありました。

特異な領域の政治取材

政治分野は、新聞協会加盟の報道機関でないところと取材しにくいところだと思います。同じ社内でも、他の部、社会部とか経済部とかの人たちが、政治取材はしない、あるいは多少はされるけれども、しにくい分野であるわけです。政治取材ができるのは、国会記者証を持ち、国会記者バッジを配付されている報道機関の私たちに限られています。

そういう中にあって、僕たちは、自分がみたもの、聞いたことを、できるだけ伝えていかなければいけないのではないかとふだんから強く思っていました。それで、この本では、自分が見た話、聞いた話をまとめて書いて、整理してみようと思いました。

自分のことを書くとなりますと、どうしても1994年、いまから15年前になりますけれども、「文藝春秋」に小沢一郎さんとの訣別を書いたときのことに触れなければならないと思います。あのときは、自分の動機としては、やっぱり小沢さんの実像を伝えたい、いつか伝えたいという思いがずうっとあったのですね。いまもそうですけれども、小沢さんについて非常に虚像の部分が多い。実際にみた人は、それほど書いてなくて、想像をたくましくしている語られている政治家であることは、いまも以前も変わりません。だから、小沢さんの実像を伝えたい。

2点目として、あれを書いたのが94年で、その前の92年に、金丸さんの5億円事件というのがありました。あのとき僕は、ほかの2人の記者と一緒に、金丸さんの誕生日に、金丸邸

に入って、取材をした。出てきたときにいただいたブドウを持っていたのです。持たされたというか、もらったというか——。そうすると後で、ある新聞や、その新聞報道を受けた週刊誌で、こんなときに、金丸邸に行つてブドウをもらってくるとは何事だ、とんでもない記者だ、というふうなトーンで書かれました。

その前に、田中さんのロッキード事件判決があったとき、昭和58年ですけれども、僕は田中邸に入った。外には社会部の記者、あるいは週刊誌の記者がたくさんいた。にもかかわらず中へ入った。しかし、出たときに、入ったのはけしからんという批判はなかったのです。でも、金丸さんのときには、先ほどのようにいわれた。やっぱり国民というか、マスコミ業界の人たちが、見る目が変わってきたんだなという感じがしました。

あれも中身を書いていれば何も言われなかったのだと思うのですけれども、政治記者の仕事として、あの中身を、金丸さんが自宅で、ああしていた、こうしていたというのをすぐ書くわけにいかないのです。いかないのだけれども、やっぱりあのときの教訓として、書いたかどうかというのが大きな基準になるのではないということも覚えました。それと、最初に申しあげたように、やっぱり自分しか書けないだろうというふうに思ってしまったのが、あれを書く動機として大きな要因でした。

一番温かかった政界の反応

ただ、そういうふうな感じで始めたので、実は厳しい反応が出るとは、書いている時点、あるいは原稿を出した時点では全く思っていなかったのです。アホだと思われるかもしれませんが、とにかく書かなきゃいけないという気持ちのほうが先に立ちまして、反応まで思い及ばなかった。で、これはもしかしたらやばいのかな？ と思い始めたのは、家内に「こういう原稿を出したよ」と見せたときです。それを読んだ家内から「ああ、あなた、これでおしまいね」と言われたので、そうか、おしまいなの

か、と思った(笑い)。

次に発売 1 週間前に、「週刊文春」の方が我が家まで取材に来られた。話しているうちに「これは発売されれば相当な騒ぎになります」と言われて、そうかと気づいて、慌てて、じゃ、これからどういう反応が起きるんだろう、起きた場合どうしようか、というのを自分で考え始めました。

あれは 9 月 10 日発売、土曜日なんですけれども、その 2 日前の 9 月 8 日に「週刊文春」が出た。「週刊文春」の中身は、9 月 7 日の水曜日にはなぜかもう全部漏れていたのですけれども、その前の時点で、一体自分はこれからどうしたらいいんだろうか、というのを 2～3 日でしきりに考えました。

まず政界の反応、次に政治記者、マスコミ業界の反応、3 番目として会社の反応、その 3 つに分けて考えて、自分なりにスペキュレーションしました。

政界の反応については、僕はもう取材できなくなるかもしれないなど、正直思いました。しかし、実は、その政界の反応が一番温かくて、梶山静六さんとか橋本龍太郎さんとか、野中広務さんが非常に励ましてくださったのです。小沢さんに近い人からも励ましを受けた。

僕がオフレコを破ったわけだから、政治家のほうはオフレコを破られる恐怖心を抱くのではないかな、と案じたのですけれども、それは杞憂に終わった。それは、小沢さんに対して非常に複雑な思いを抱かれた政治家の方が潜在的にたくさんいた、ということなのではないかなと後で思いました。

政治記者、あるいはマスコミ業界の反応ですけれども、これはかなりきついものがありました。いまでもオフレコの問題というものはあるのですけれども、一たんオフレコの約束をして聞いた内容は、やっぱり相手の了解なしに絶対公表してはいけないという論理は、かなり強固なものがありました。いまでも活躍している女性評論家の方から、雑誌で、田崎記者はジャーナリスト失格とか、あるいはマスコミ評論家の方からも、記者失格だというふうに実際に書かれまし

た。ふだん自分も記事を書いていますけれども、そういうふうに書かれますと、内心はかなりこたえる思いでした。

他方、同僚、一緒に取材している人たちの中にはそう批判的ではなく、別の反応もありました。いい悪いは別として、いまこの問題で田崎さんがやめたら、もう政治家のオフレコ話は書けなくなるから、ここは頑張っしてほしい、という意見もありました。

会社は 2 週間の出勤停止に

そして、会社の反応。僕は、これは自分で本当に読み間違えたと思います。自分の想定した中では一番厳しかった。自分の気持ちの中では、ここまで自分で取材してきた、それなりの特ダネも取って書いてきたから、そんな強い処分は出ないのではないかな。そもそも書いたことだし、破廉恥罪なんかじゃないわけですから。しかし、会社の反応は極めて厳しくて、2 週間の出勤停止を受けました。

当時、取締役会で自分の処分を検討するときに、後で聞いた話ですけれども、取締役 7 人のうち、首を切るべきだというのが 3 人、いや、強い処分だというのが 3 人。最後は社長の決裁で、処分ということで首は切られなかったのですが、会社の規程集というのはそのときにならないと読まないものですが、読んだら、懲戒処分の次が出勤停止処分でした。それが最大 2 週間となっていて、その最大のところにちょうどはまったというか、そういう処分を受けました。それは自分のまさに奢りでした。

後で、外務省の知人に聞きましたら、「組織というのはどこでもそう。いざ処分するときは、過去の実績というのは一切関係ない。その場のことで冷徹に判断するものだから、当たり前だよ」という話をされた。また一つ勉強したなと(笑い)、自分がその身にならないで勉強するのがよかったのですけれども、自分の身を挺して勉強したという一つの事柄でありました。

では、あのとき、オフレコを破ったことが正しかったのかどうか、ということについて多少

申しあげます。正しいというふうに自分ではいい切れないわけです。やっぱりオフレコを破ったことの重み、ほかの人に向けた迷惑等々を考えると、申しわけないという気持ちはもちろんあります。ただ、政治記者というのは、ここには政治記者の方もいらっしゃるのかわかっていただけたと思うのですけれども、私たちの仕事は権力の監視、解明、権力者たちに肉薄して、そこから重い口を開かせて、事実の断片を聞き出して、それをつなぎ合わせて真実に迫ることだと思うのですね。

そのときに、知る過程での取材対象と取材記者の信義の問題と、知り得た秘密の報道、その間で常に葛藤があるわけです。それを、知り得た秘密の報道に、ぐっとウエートを置いてしまったのが自分のケースなのですけれども、そこで取材記者の信義として正しかったのかといわれると、それは正しくなかったということは認めざるを得ないのだろうと思います。

オフレコの時効問題

ただ、その後の反応をみていますと、書かなかったほうがよかったか、書いたほうがよかったか、どっちなんだろうということを考えるときに、やっぱり書かないよりも書いたほうがよかったのではないかな。その後、自分の原稿がいろんな雑誌等に引用されていて、それで小沢さんのことがよくわかったという方も少なからずいて、やっぱり書いたほうがよかったか、書かなかったほうがよかったかに思いを致すときに、自分の行為を全面的に否定する気持ちには、いまだになれません。

その中で、オフレコというのは、永久にオフレコなのだろうか、オフレコに時効というものはないのだろうかということを考えます。政治記事で、検証記事を書くためにはオフレコの話もある程度書かないと検証できないわけです。だから、一番短い区切りとしては、一つの政局が終わったときに自動的にオフレコが解除される時期と理解することもできる。一方で、最もきついオフレコとしては、聞いた話を墓場ま

で持っていくんだ。それが記者の仁義であるという立論をされる方も当時いて、うん、そうかな？　とも思ったのですけれども、一方で、その中間として、その政治家が死亡したときにオフレコを解除されるときだ、というふうな解釈をされる方もいました。

ただ、この時効の問題を考えると、そのオフレコ話が読まれる、読者が読んでくれる時期というのものもあるように思うのです。僕の場合は、あまり生々しいときに書いてしまったということはあるのですけれども、そのオフレコの問題というのは、永久にオフレコなのだろうか、どうなのだろうかというのは、一度真剣に考えてみるべき問題ではないかなと思います。これが、私の小沢さんとのことを書いた記事の経緯です。

今回の本で、自分が訴えたかったことは、政治家の質の低下が急速に進んでいるということです。特に自民党議員でそうなのですが、本の中でも書きましたが、やっぱり太平洋戦争を体験した世代がいなくなっている。また、政治家に対する批判がすごく多くなっていますから、朝日新聞の世論調査ですけれども、信頼される職業を聞くと、最下位になるわけです。官僚と政治家が信頼されない。それは宗教家よりも低いというのがその調査結果でした。そんな、国民から信頼されない職業に決している人材は入ってこないだろう。国民に信用されない職業にした責任は、私たちというか、私にもその一端はあるという責めは受けなければいけない。そこで、自分たちの批判の仕方、あるいは批判の量について、自分なりに少し抑制しなければいけないのではないかなという思いもしました。

政治家を鍛えるシステム消失

次に政治分野で、人を鍛えるシステムが失われているのではないかなという気がします。それは自民党の派閥だけではなくて、民主党の議員の集まり、議員だけの集まりに呼ばれてちょっとお話しする機会があったのですけれども、

小沢さんの問題でも、小沢さんにどう対処していいか全くわかっていない。あるいは権力闘争の仕方そのものをわかっていらない議員が民主党には多い。民主党には政策に詳しい人はたくさんいるのですけれども、政治における権力闘争というのは、僕は当然の行為だと思うのですが、そういうことに非常に不慣れで、あまりやってない。

一方、自民党のほうは、権力闘争がまあまあ得意な人はいるのですけれども、それだけに終わっている人も少なくない。どこか政治の分野で、議員も記者も、あるいは有権者の人たちも、ある種の信頼関係を持って立て直していかないと、この質の低下を抑えることはできませんし、選挙制度のせいもあると思うのですが、この先、良くなるという保証は全くないと思います。

そういう政治家の質の低下の一方で、記者の質も、どうも落ちてきている。あんまりいうと自分が年寄りになったみたいで、年寄りの冷や水ととられてはいけないと思いつつ、現場の記者を見ているのですけれども、例えばこういう会見場に来て、後ろのほうで会見を聞いていると、現場の記者たちはほとんどパソコンをたたいて、表情も見ないでひたすら記録している。記録係のようになってしまっている記者がいる。

欠かせないヒト取材

最近の政治記者を見ていると、割と政策が好きになってしまって、あえて政治取材をヒト取材と政策取材というふうに分けますと、派閥が強固な時代、自分が現場にいた時代は、100%、ヒト政治を取材していました。いま、ヒト取材の部分が非常に弱くなって、政策取材に特化していく記者も見受けられる。選挙は政策で争えという大義名分がありますから、当然政策はこなさないといけないのですけれども、こういうことをいうと怒られるかも知れませんが、有権者は政策で投票しているだろうか。あるいは政治は政策で動いているだろうか。そ

う考えるときに、いい政策だからこの人のもとに集まるとか、ということでは必ずしもない。やっぱりその人の発する何か魅力、あるいは人気等で集まっているわけですし、やっぱりヒト取材を、政治取材において欠かしてはいけないのではないか、という気がいたします。

政治家と記者の関係が、かなり希薄になってきている印象も受けます。僕たちの時代がよかったというわけではないのですけれども、僕たちの時代は、政治家とかなり深いつき合い、まあ飲み食い等々を通じていろんなことを勉強させてもらった。多分、向こうも私たちと接触する中で、いろんなことを考えたのではないかなと思うのです。けれども、そういうことがどうも希薄になっていて、大体テレビを見てると、新聞記事を読まなくても政治の様子がわかる、というふうにいわれることが少なくなってきた。

政治家のほうも、不特定多数の人に訴えるには、朝、駅頭で立つか、あるいはテレビに映るのが一番手っ取り早い手段であるというので、自民党議員の場合ですと、テレビカメラがあるとすぐそこへ近寄って行って、しゃべる。新聞記者も、そこである程度取材できるものですから、あしたの記事を書くためにはそれでいいやという話になってしまっていて、もう一つ奥深いところに入っていく努力、関係の深さが、最近、ちょっと弱くなっている。人によっては大分弱くなっていると思われる方もいるかもしれませんが、それでいいのだろうかという気持ちもありまして、これを書きました。

自慢話になってはいけないのですけれども、自分たちがみてきたこと、聞いてきたことを、この時点でまとめて書くことが経験の伝承であり、政治家なり、記者の人たちの将来、何か役に立てばと、そういう思いで今回の新書を書きました。

以上、私、30分ぐらいしゃべる予定で、大体時間が過ぎましたので、あとは、皆さんの厳しい叱正を受ける中で、また自分の考えをお話ししたいと思います。

質疑応答

司会(倉重篤郎企画委員 毎日論説副委員長) ありがとうございます。多岐にわたっておりまして。司会の特権で、私から一つだけ質問をして、あと皆様にお任せいたします。

ぜひ田崎さんに小沢一郎論をうかがいたいと思います。小沢一郎と訣別されたのが94年で、それからもう15年、その間、彼は野党第一党から小さな政党になったり、現在は、民主党のある意味では長になって、目まぐるしい再編を続けていました。その間、一たん決別した政治家として、彼のそういう活動、活躍をどういう気持ちで見てこられたのか。

そして、先ほどおっしゃった小沢一郎の虚像をはいで実像を伝えたいという、その時点での小沢一郎論と、この十何年間の歩みを経たうえでの小沢一郎は、違うものがあるのか、本質的には同じなのか、その本質は一体何なのか。最後に、この小沢スキャンダルで、彼はどのような行動をとるのか、その辺を。

田崎記者 あまり答えたくない質問なんですけれども、小沢さんについてずうっと見ていますと、一言でいうと、学習効果が少ない人。パソコンをいじっていますと、ある変換を押すと、2回目からはそのとおり文字が出てきて、前の間違いは出てこないのですけれども、どうも同じ失敗を割合繰り返す。失敗から学ぶということが量として少ない人じゃないかなという気がします。

今度の局面をみていまして、3月4日に、記者会見される姿をみて、僕は直観的に、あ、辞めないなと思ったのです。それは、リクルート事件や金丸さんの5億円事件のときの検察批判と、西松建設で秘書の方が逮捕されたときの論理構成がダブって見えまして、あ、そこに入っちゃいけないのに、またはまっちゃった、という感じです。それは、彼のリーガルマインド、法律家としての。大学時代を通じて法律をかなり勉強された方で、あそこへはまると、もう抜け出せないわけなのです。

別の例を挙げますと、国連軍平和維持軍への参加の問題があります。あれも、あの論理を肯定する人は、いま、ほとんどいないと思うのですけれども、小沢さんは一貫してあの主張を変えないのです。彼の法律論の中では、あれは強固とした論理、正当性を持って彼の頭の中にインプットされている。

政治資金規正法に対する解釈の問題でも、要するにいくらもらってもいいんだ、それが透明であればいいんだというのが彼の解釈で、その部分で、もう彼の信念は、おそらく変わらないだろうと思います。

この後、辞められるかどうかということなんですけれども、最初に直観したとおり、辞めない。ご本人が何もない中で自主的に辞めるということはないだろう。仮に選挙データが何か悪いものが出て、それだけでは辞めないと僕は思います。

かつて、こういうことがありまして、新進党時代に、なかなかブームが沸かなかったとき、小沢さんは梶山さんと2人だけで会ったときこういうことをいわれているのです。「風が吹かなくて、たこが揚がらなかったら、おれが走ってたこを揚げる。それで、自分が走ってもたこが揚がらなかったら、崖から飛びおりる」。それでもたこを揚げるんだということをおっしゃっていたのです。

けれども、実際に取材しますと、民主党の中のこの問題に対する不満、深刻さは相当です。1週間地元に戻るごとに、よりきつい有権者からの反応を受けるという繰り返し、ずうっと事件以降続いています。今週お会いした議員も、やっぱり先週よりきつくなっているということをおっしゃるんです。そういう方々が、民主党の中で、何か行動を起こしていかないと、小沢さんは通常の状態では辞めないと僕は思います。

司会 ありがとうございます。では皆さん、ご質問をどうぞ。

質問 いまのお話の関連で、その辞めないの

は、ほんとにもう自分じゃないと政権交代できないと思っているから辞めないのか、悲願の政権交代まで辞めるに辞められないと思っているのか、あるいはここで代表を辞めてしまったら、やっぱり自分の政治生命が失われてしまうと、ほんとに政治家小沢一郎の終わりになると、そう思っているから辞めないのか。そのあたりはどうなのでしょう。

田崎記者 ロッキード事件で逮捕されて裁判闘争を抱えた田中角栄さんと、いま、西松建設で大久保秘書の裁判を抱えた小沢一郎さんの姿が、僕にはダブって見えるのです。田中さんはロッキード事件で無罪判決を勝ち取るために頑張った。小沢さんは、あの西松の問題は、単に自分の問題ではなくて、日本の民主政治の問題だということも発言されているのをみると、あれは、民主党として、彼の頭の中ではやっぱり闘っていく感じだと思うんですね。だから、通常の政治家の判断とは、しょってる荷物が違うから、あまり通常ベースの判断でしないほうがいいのではないかなと思います。

そういう中で、これからは自分の読みですけども、やはり自分が政権交代で——民主党がいついてる政権交代というのは、要するに、権力をおれに寄せせといっていることにすぎない面もあるんですけども、権力を手元に引き寄せて、それからもっとやりたいことがあるんだろう。必ずしも僕はそれが、総理大臣になりたいこととはイコールで結びつかない。総理になる、ならないよりも、政権交代、権力奪取を実現するということで、これからやっていけるのではないかなと思います。

質問 小沢さん家族というか、奥さんはどう思っているのだろうか。辞めればいいと思っているのだろうか。健康を考えて。

田崎記者 ちょっとそれに答える材料、僕、全く持ってないですね。人によっては、小沢さんの考え方に奥さんの意見が、結構、反映されているという方もいらっしゃるんです。けれど

も、僕が小沢さんと深くおつき合いした時代も、奥様とじっくりお話しするという機会がなかったんですね。だから、奥様の考え方、発想というのはわからない。いま、その小沢さんと奥様との関係というのも、僕は間近に見ていないもんで、申し訳ないですけど、なんとも答えられない。

質問 小沢さんの政治団体は30億円のお金を持っている。マンションもたくさんお持ちである。そこで、法理論ではなくて政治的責任と道義的責任というものを、おつき合いした範囲内で、どれほどお持ちなのか、教えていただきたい。

田崎記者 確かに、国民というか、有権者は、そういう気持ちで小沢さんを批判しているのだろーと思います。小沢さんが、政治的、道義的責任を感じていないかという、それは感じるんじゃないかなと思うんですよね。でも、いま彼の頭の中を支配しているのは、法律的にこれは違反なのかどうかというところの争いから出発していますから、政治的、道義的云々の問題よりも、やっぱり検察との闘いのほうが頭の大半を占めているのではないかなと感じます。

マスコミ論調、社説を読んでいまして、あるいは党内でも、それでは政治的、道義的責任は感じないのかという話はあるんですけども、物事の判断基準として、彼にとって大事なのは政権交代、権力を奪取すること。文字どおり、彼がいつているように、そこにウエートを置いて考えていらっしゃる。かつ、裁判の重荷を背負っているわけですけども、それを考えると、政治的、道義的責任云々は、ずうっと端のほうに行っている感じが、僕はします。

質問 私は経済部でよくわからないのですが、いまでもお話ですと、小沢さんが最後まで頑張る。そうすると麻生さんも頑張る。公明党は都議選の後にしろという、8月か9月の総選挙になる。そうすると、両方とも過半数

が取れないとなると、再編成になるのか。政治記者としてのこれからの政局の読みをちょっと教えていただきたい。

田崎記者 えーと、外れるとばかにされるだろうから(笑い)、あんまり申しあげたくないんですけども、外れても、いまの時点の分析ということでお願いします。

僕は解散総選挙の時期は、5～6月とかいわれていますけれども、それはもうあんまりなくて、8月下旬か9月初めの投票、お盆明けまで行くのではないかとみています。可能性としてもう一つあるのは、8月上旬に、つまり8月9日投票日というのは残っているんですけども、まあ後ろのほうでみています。

その勝敗結果がどうなるかについては、いまは流れを見ているしかないんですけども、現時点だけを考えるなら、まだ民主党のほう有利なように思うんですね。

しかし、じゃ、その夏の時点で状況がどうなっているかという、与党のほうは、総理総裁の何か失敗、失言、軽口がなければ、それなりにいまの支持率は維持できていくし、もうちょっと上がるかなという感じもします。1～2月の時点のような総理ご自身の失敗がなければ落ちないだろうと思います。

一方、民主党のほうは、状況が日に日に悪くなっている、ということを民主党議員の方が肌身で感じている。例えば集会への集まりが悪くなったとか、街頭演説していてもほとんど反応してくれないとか、そういうふうなことが、個々の議員の中で悩みとして積もってきているんですね。そのマグマが噴き出すのか噴き出さないのかが、現時点では判断がつかない。噴き出せば小沢さんも何か考えなきゃいけない。

小沢さんが考えるとしたら、民主党で、例えば30～40人の人たちが集会を開いて、「小沢さん、辞めてください」というのを明示するか、暗示するかして、そういう数の力をみせないと、小沢さんは変わらないんじゃないかと思うんですね。

経験的にそう考えるのです。田中派で創政会

をつくるときに、小沢さんや梶山さんや羽田さんは、竹下さんを認めてくれということを、いろんな形でアプローチしたんです。けれども、田中角栄さんはついに聞かなかった。やっぱり数の力を見せないと田中のおやじは変わらない、という考えに至って、創政会結成をしてくんですね。

創政会を結成した20日後ぐらいに、田中さんが倒れられたので、また局面が変わっていくんですけども、あの途中、倒れられる2～3日前の時点で、小沢さんたちが目白に行ったときに、もう創政会を暗に容認する話をするんですね。君たちとおれたちは同心円だ、心は同じなんだということで容認していく。そういうふうなことなので、小沢さんに対しては、数の力を見せない限り辞められることはないだろうと思います。現状ですと、麻生さんと小沢さんがそのまま総選挙に突入する可能性が高い。

その結果については、アップトレンドと、ダウトレンドがどういう形で行くか。いま時点で明確なのは、自民党は当然3分の2は取れないだろう。ことしの2月ごろまでは民主党の圧勝だと。例えば数字的には民主党260、自民党160ぐらいだろうというふうにいわれた時期もありました。けれども、それほど民主党が圧勝することはなくなって、民主党が辛うじて第一党を取る。あるいは自民党と公明を合わせると、過半数近くに行くぐらいの感じしか、いまのところわからないのではないかと思いますね。だから、個々のトレンドでどうなるかというのは、やはり小沢さんの進退に結構左右されるだろうと思います。

質問 ちょっと素っ頓狂な話で申しわけないんですが、実は私、社会部にずうっといた者です。オフレコの問題なんですけども、ロッキード事件のとき、ちょうど私、国会の社会部を担当していました。田中派の記者会見では、「はい、社会部の方はこれまで。外へ出てください」といわれて、私たちは泣く泣く、悔しがりながら外へ出たものです。何回かありました。その後、何が話されたかは、いわばオフレコな

んでしょう。

いま、オフレコの話を書いたんですけども、もし、私たちが出た後のオフレコの話がすらすら出てきてしまうのか、それとも先ほどもおっしゃったように、死ぬまで持っていくのか、というようなことにかかわってくるんですが、私たちの立場からいえば、死ぬまで持っていくてもらわなきゃ立つ瀬がない。私としては、すごすごと泣きながら外へ出ていった立場としては。そういうことが一つあるんですね。

そういうオフレコの考え方、私ども社会部の取材の相手はほとんど公務員であります。警察官であったり、検事だったり。これは、ご存じのとおり、ここは公務員法違反、職務上知り得た秘密を取材するわけですから、公式に言えば取材源をいえないわけです。いけば公務員法違反である。その辺、政治部の方はオフレコをどういうふうに考えていらっしゃるのかということ、もう一度確認したい。

田崎記者 非常に難しい問題で、割と個人の考え方、その個人と政治家との関係で決まっていくという部分もあるんですね。記者クラブ全体でオフレコで聞いた話を出すかどうかというのは、つい最近では、漆間官房副長官の問題がありました。あれは新聞社によって対応が分かれたわけですね。それで、どっちが正しいかと、朝日新聞と読売新聞がどっちが正しいかといわれると、ちょっと答え切れないですね。

それは別として、通常の、ふだん、議員会館を回中で聞いた話を、自分がどの程度書くかは、その政治家との信頼関係で、話しているうちに、これ、書きちゃっていいんじゃないの？と思うこともままあるんですね。書いても怒らない人、あるいは書いたら必ず怒る人とか、いろいろ取材しながら見分けて、僕はできるだけ書いていくべきだろうという気持ちを持っています。

先ほどおっしゃったように、墓場まで持っていくかないと、死ぬまで持っていくてもらわないと立つ瀬がないというのも、それは業界の人としては気持ちはわかるのですが、僕たちは国会

記者証と国会記者バッジをもらって、それはだれでも手に入るものではなくて、マスコミに勤めて、それである種代表的な取材を、国民との関係においては常にやっているわけですね。そこで、自分が知り得たことは、何らかの方法で伝えていくというのが、本分ではないかというのが、僕の考え方です。

最初にお断りしませんでしたけれども、一応、ここへ出てくるに当たり、会社の許可をもらったのですが、僕がずうっと申しあげたことは、会社と打ち合わせているわけでは全くないので、あくまで自分個人のことをいろいろ申しあげました。

質問 私もオフレコのことを聞きたいと思います。田崎さんが小沢さんのことを書いたというのは、おそらく2人だけの、さしのオフレコだと思うんですよ。だから、小沢番の人たちでとか、この前の漆間さんみたいなところの、担当者の中でのオフレコというのとちょっと違う。もう少し深い。それだけに田崎さんしかそのときに聞けなかった小沢さんの肉声を、やはり残したいという気持ちが、僕はあったと思いますよね。だから、そういう点では、ほんとに貴重な資料であり、歴史的な材料なんだけれども、やっぱり一番重要なのは、相手との信頼関係。だから、時効の中にもう一つあるのは、小沢さんに対してどういうメッセージを送って、これはやっぱり出さなくてはいけないよ、という一つの仁義というか、結末というか、一つの話をやっておく必要はあると思うんですよ。だめだという場合も当然あるだろうけれども。しかし、そのうえでもやはり出さなくてはいけない、小沢さんが断ってもやはり出さなくてはいけないものというのももちろんあると思いますね。

だからそういう意味で、ああいう本を書かれたときの小沢さんとの関係と、それからその後の15年間の小沢さんとの取材が、信頼関係というか、記者と政治家との関係がどうなったか、小沢と田崎という2人の関係がどうなったかというのも、ちょっとうかがいたいと思います。

田崎記者 ご指摘のとおりです。そのときの事情を若干説明してご理解を得たいのですけれども、おそらく他者からみれば、小沢さんと、すごい深いつながりをしていた記者だというふうに、あの当時からみられていたと思うんですね。ところが、あれを書く2年半前ぐらいの時点で、自民党大会の取材で小沢さんの席に寄っていったらちょっと話しかけたら、全く返事をしなかったのですね(笑い)。で、なぜかわからなくて、いまだにその理由はわからないんですけれども、その後、秘書の方を通じて、何度もアプローチしましたし、自分自身も手紙を2度書いて、どういう事情か教えてほしいと、結論は変わらなくても、経過だけでも教えてくれないかというぐあいをお願いしたんですけれども、ナシのつぶてだったのです。

そうすると、いざ書くということを決めたときに、小沢さんのほうに何かしておいたほうが確かによかったのでしょうかけれども、もう、そのときの人間関係において、政治家と私との関係において、すでにそれをしてもしなくても一緒の状況になっていて、こちらもちっとけんかつ早いところがあるもので、小沢さんがその気ならこっちもやりますよ、みたいな感じの気分にもちよつとなった部分もあります。

質問 政治家の質がめちゃくちゃに下がっているというのは、僕も同感なんです。僕も、ある政治家とちょっとおつき合いしたことがあるんですけれども、やっぱり太平洋戦争を経験した人たちに比べると、いまの若い人たちは、そんな経験ありませんし。非常に世襲議員が多くなっているというのも、簡単に政治家になってきて、できるという、この状況もあるのではないかなと思うんです。

そういう状況の中で、いま若い政治家をみて、新しい政治家のタイプ、昔にない政治家のタイプを目指しているというような人たちがもしいたら、これは推薦できるぞというような人たちがいましたら、教えてください。

田崎記者 私が挙げているのは、民主党だと、

長妻昭さん、馬淵澄夫さん、細野豪志さん、参院では福山哲郎さん。あと、民主党の、1年生で、小川淳也さんとか、北神圭朗さんとか、大串博志さん。小川さんは、総務省出身、北神さんや大串さんは財務省の出身なんですけれども、やっぱり権力機構にいながら、権力を手放して、自分が政治家にならなければ政治を変えられない、というふうな決意に至った人たちは、見どころがあるなあと思うんですね。

自民党の若手になると、それほどいい玉がないんですけれども、菅義偉さんはいままでにないタイプというか、いまの自民党に数少ないタイプの政治家だという感じがします。

総じて申しますと、いまはものすごい政治の危機だと思います。自民党にとっても民主党にとっても、非常な危機にあるということは、だれもがそう思っていると思うんですね。だから、変わるとしたら、危機の中でしか変わらないですから、いま民主党がだらしないと半分思うんですけれども、やっぱりその中で彼らなりにもがいて、その危機を打開しようとする力に、僕たちとしてはかけるほかないし、それをきちんと報道していきたいという感じは持っています。

司会 ありがとうございます。前向きな質問が出たところで、ここで質問は締めたいと思います。田崎さんといえば、我々の先輩でずうっとやってこられて、私も一政治記者なんですけれども、94年に「文藝春秋」に小沢さんを書かれた後に、『経世会死闘の七十日』というのを出版されています。伊藤昌哉さんの『自民党戦国史』に次ぐものだという評価もあり、その後は梶山静六さんの伝記も書かれています。今回の本もすばらしいんですけれども、この2冊は多分歴史に残る本になっていくと思って、ここに持参しました。これをご紹介した上で、最後、締めの質問です。

梶山静六と小沢一郎の差というのは、戦争体験者と非体験者の差なのかというのが一つ。それから小沢一郎さんというのは、とにかく、人をボンと切り捨てて、それがゆえに、いま死屍

累々という形で側近が離れ、新聞記者も離れている中で、なお永田町の中核に居座っている。この矛盾といいますか、人の和とか、協調とかそういうものを抜きにして、そこに座っているということの不思議さを、どういうふうにみたらいいのかということをお聞きして締めたいと思います。いかがでしょう。

田崎記者 はい。小沢さんがいま力を持っているのは、田中さんや金丸さんに育てられて、自民党の総務局長、議運委員長等々の党務をしっかり自分の身につけることができた。やっぱり選挙の問題について、小沢さんにかなう政治家は、いま与野党含めていないと思うんですね。

梶山さんと小沢さんとの差で、僕は決定的だと思うのは、梶山さんから聞かされた話ですが、物事には絶対はないんだ、絶対こうなるということはないんだ、ということで、「絶対」ということを強く忌避されていた。それは梶山さんの戦争体験から来るもので、梶山さんは陸軍に入られて、戦争を経験されて、陸士で終わっているんですけども、その方が、やっぱり昭和20年の敗戦によって、いままで信じてきたものがガラガラッと崩れる体験を味わわれて、

どんなに絶対絶対といっても、やっぱり絶対ということはないんだということを、肌身をもって体験されたわけです。

それに対して、小沢さんは、昭和17年生まれ、教育はずうっと戦後教育で育てられて、ある意味で一直線というか、いまの政治資金規正法違反の問題、国連軍の問題、その他の問題でも、これが正しいと思ったらその時点ではもう突っ走ってしまうんですね。絶対視する。その違いかなという感じが僕はいたします。

司会 ありがとうございます。それでは田崎さんがきょうゲストブックに書かれた言葉を紹介します。

「力及ばずして倒れることを辞さないが、力尽くさずして倒れることを拒否する」。ありがとうございました。

田崎 どうもありがとうございました。

(文責・編集部)